



CES2018 が予言する「脱スマホ時代」の到来

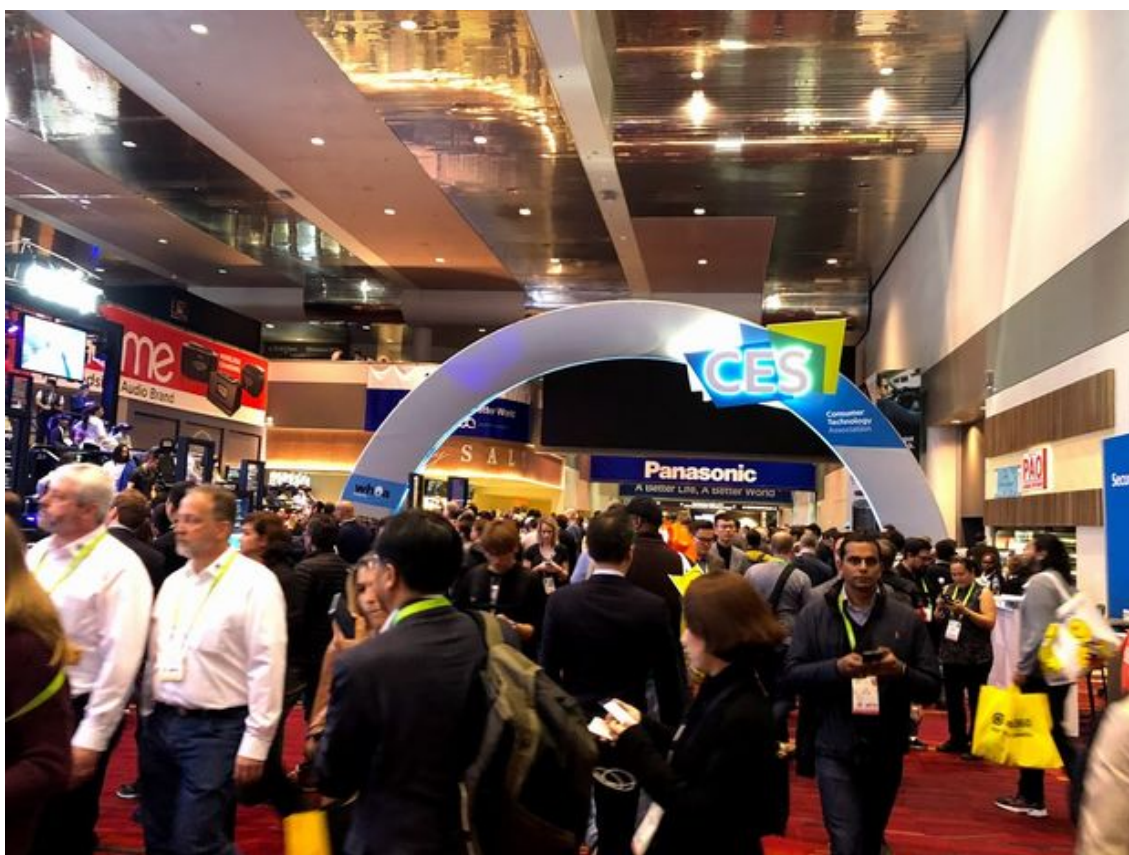
一般財団法人マルチメディア振興センター（FMMC）

ワシントン DC 事務所 所長 嶋田信哉

はじめに

1月9日から12日にかけて、ラスベガス・コンベンションセンターにおいて世界最大のIT・ICT関連展示会である「CES2018」が開催された。CESは、世界各国の大手ハイテク企業からスタートアップ企業まで、自己の先進的な取組や新商品、開発中の商品・サービスをPRする格好の場となっており、今年も約18万人が参加、4500の事業者が1万以上のブースを出すという盛況ぶりだった（速報値）。

参加企業では、米国企業が最多で1600社強であるが、中国企業の出展も1551社で猛追しており、特に、アジアのシリコンバレーと呼ばれる深圳だけでも482社出展していた。また、昨年に引き続き、フランスからも350社の企業が出展しており、昨年以上に各国とも国を上げて積極的な支援を行っている様子が見て取れた。



スタートアップ

CES2018 では、スタートアップの出展が昨年までの勢いを遥かに上回る活況で、国別での展示合戦とも言える様相を示していたのが印象的であった。

最も精力的だったのは 270 社のスタートアップと大臣 2 名を送り込んだフランスであり、圧倒的な存在感を示していた。



オランダが 53 社と続き、イスラエル、英国、カナダ、中国、韓国も展示ブースを国別に出していた。



日本については、JETRO がスタートアップエリアに 7 社の日本企業の展示を出展しており、また、別会場では Japan Tech が 13 社の展示を行っていた。

このほか、Cerevo や Whill など以前より CES で展示を行っている日本のスタートアップについては、独自にブースを展開していた。



自動車

モーターショーと間違われるばかりの様相であった昨年以上に自動車関連企業が参加し、今年はコンベンションセンターの 3 つあるホールのうちの一つノースホールのすべてが自動車コーナーとなった。大手各社の展示も自動走行一色であった去年と比べると各社様々な印象を受けた。

Amazon、Uber、中国 Didi Chuxing との新しい協働の形を Palette というコンセプトカーで社長自ら示したトヨタ、自動車の展示は全く行わずロボット技術や新しいモビリティの形を示したホンダ、「接続 (Connected) ・自動 (Autonomous) ・共有 (Shared & Services) ・電動 (Electric)」というビジョンを「CASE」として示したメルセデスベンツ、果ては自動車はほとんど出ないスマートシティの展示を行ったフォードなど、多種多様であり、新しい時代の到来を予感

するものとなった。



IoT

2015 年の CES で、Samsung が「5 年で 100% の機器を IoT 化する」と宣言し、本格的な IoT 時代が幕を開けた。それから既に 3 年が経過した本年の展示では、最早 IoT というカテゴリは存在する意味がないほど、多様な分野において、すべての機器が IoT 化しており、まさしく IoT がコンセプトステージから実装ステージに移っていることが見て取れた。

旧来型の IT 産業だけでなく、医療、ヘルスケア、製造業、玩具、スマートホーム、寝具、ドローンその他、ありとあらゆる機器がネットワークにつながることで、どのような価値が創造されるのか、各社がデモンストレーションを実施していた。



スマートスピーカー

今年の CES では従来展示を行っていなかった Google が独自にテントを設営し、大規模な展示を行うことで、Amazon に宣戦を布告することが予想されていたが、初日・2 日目とラスベガスでは 4 か月ぶりの雨が降ったことから、停電等のトラブルが起こり 2 日間開場できず、残念な結果に終わっていた。



5GとAI、脱スマホ時代

上記の製品すべてのインフラとなるものが 5G と AI である。特に次世代移動通信規格である 5G は、単に現行の 4G・LTE を光回線と同様に高速・大容量化するだけのものではなく、超低遅延・省機能化・ネットワークスライス機能と合わせて、すべてのものがネットワークにつながる IoT・自動走行時代を実現するために不可欠なインフラとして認識されている。超遅延・省機能ネットワークの 5G が存在しない現状では、IoT といっても大半の機器は、スマホに WiFi や Bluetooth で接続し、そこからインターネットにつながっているだけで、すべてのモノがインターネットにつながっている (Internet of Everything) のではなく、すべてのモノがスマホにつながっている (Smartphone of Everything) だけである。自動走行車はもちろん、上記の IoT システム、VR、スマートホーム機器は、スマホ経由でのインターネット接続では潜在能力を最大限発揮するとは思えず、5G のインフラが整備され、AI やエッジコンピューティング技術がすべての機器のために実装され、正しく IoT、IoE が実現された未来が、5G 時代とともに迫っていることを予感させた。

※インテルは、エッジコンピューティングのデモンストレーションとして、ラスベガスの有名ホテルベラジオと協力して同ホテル名物の噴水ショーと 250 台のドローンショーを連携させるデモンストレーションを実施していた。

<動画 URL>

<https://vimeo.com/intelpr/review/250160772/fe37607442>



おわりに

2013 年に最早家電見本市ではないとして正式名称を「CES」に改称した本展示会であるが、5 年が経過し、完全に家電からネットワーク、次世代 ICT の展示会へと変容したように見える。テーマが、テレビ、PC、携帯電話、スマホ、IoT へと移り、現在は 5G や AI を基盤とする IoT の実社会利用モデルを提示する会に変わっている。スタートアップの参加者数が急増しているのも、IoT の実装ステージでは、メーカーやキャリアが大規模商品、システムを提示するだけでは需要が満たせず、多様なアイデアを柔軟なデザインで実施することが重要になって来ていることの証左であろう。

2018 年は 5G の商用サービスが開始され、完全自動運転車の公道テストも本格化する。次回 CES は、2019 年 1 月 8 日から 11 日まで開催される。変化の激しい業界動向を感じることでできる数少ない機会として、来年も注目したい。